日本語の起源を考える

工藤進・談（高橋宏彰・編集）

「日本語はどこから来たのか …」この問いは 私たちのロマンを掻き立てるものだ。時とともに変化してゆく言葉の起源をたどる試みに迫る。

ヨーロッパには大まかに 40 ほどの言語が現存しますが、その系統を探る方法として発達したのが比較言語学です。18 世紀末、インドの古語を基にしたサンスクリット語がヨーロッパ言語に連なることが分かり、まとめて印欧語（インド・ヨーロッパ語）と呼ばれるようになりました。サンスクリットと、古代ギリシャ語の祖先に当たるヒッタイト語、ラテン語、ほかに英語やドイツ語の祖先のゴート語などの共通点を比較すると、文字として残されていないものの、より古い言語「印欧祖語」を想定することができます。

興味深いことに、最近の遺伝子研究では、日本人を含む極東アジア人は遺伝子的な観点では中国南部や東南アジア系よりも、ヨーロッパ人に近いことが分かっています。人類学的起源と言語の起源が同じものだとは言えませんが、ある程度関連する可能性はあると想像してもよいのではないでしょうか。印欧祖語と日本語の起源がつながっている可能性も十分に考えられます。むしろ、日本ははずれに位置しているので、現代の印欧語よりも印欧祖語の特質を残しているのではないかと思っています。

日本語と現代の印欧語を比較するとき、性や人称、文法的な数概念などの扱いが異なることがよく指摘されます。たとえば、印欧語の多くでは、名詞を男性・女性の二つ、もしくは中性を加えた三つに区別します。一見、性を分けない英語でも ship を指す代名詞に she を使うなど、その名残をとどめています。こうした「性」はもともと三つでしたが中性形は男性形に似ていたので、現代までに多くは男性形に吸収され二つになったと説明できます。

ではそもそもの「性」の起源はどうでしょうか。昔の人は、「川」など動くものに対して「生きている」と考えるような感性を持っていたようです。実際、ヒッタイト語では「生きている／生きていない」といった「二生」に分けていました。やがて、生きているものを「男／女／生きていないもの」という三性ができたのです。「性」がないとされる日本語も実は「生」で名詞を区別してきました。人間に近いものには「ラ」「ドモ」などをつけて複数形にすることもその表れです。犬などには擬人化して「犬ドモ」という使い方もしますが、「石ドモ」という使い方はしません。こうした生の分け方は、印欧語の古い状態に近いと考えられます。

同様に、一見では異なって見える日本語と印欧語が、祖語をたどると共通するケースは、先ほどの人称、数のほか、格変化や be 動詞など言語の根本的な特徴の中に多く見られます。こうした比較は抽象的だと思われるかも知れませんが、言語を比較するときは、単純に音韻を比較してもつながりが見えてこないのです。言葉の形や意味は、時とともに大きく変わるので、現在の形で比べても仕方がないのです。それでも、古い単語の形を想定して比較すると、日本語と印欧祖語やアイヌ語、朝鮮語とのつながりがあるように思えます。

日本語は、ほかの言語とのつながりが分かっていないとされますが、まったく何もないところから生まれたとは考えられません。私は日本語に欧州祖語の要素が残っていると考えるのと同様に、アイヌ語には縄文時代に日本で話されていた言葉のある部分が残っているだろう、方言にも古い日本語が残っているだろうと考えています。起源問題というのは政治的なものになりがちな側面がありますが、中央からの視点では見えてこないものがあると思うのです。

（『理想の詩』2006 年 5・6 月号。特集「言葉ってなんだ」理想科学工業・広報室）